
とある敗者達の黙示録

tetsu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある敗者達の黙示録

【Nコード】

N0157Q

【作者名】

t e t s u

【あらすじ】

立っていた場所は違おうとも、裏側を歩む二人の共通点は”負け犬”。

”負け犬”の少年の脳裏に過ぎる”サクラ”と目の前に居る”桜”の少女。

見えないところで繋がっていた運命はいつしか。

二匹の“負け犬”と一人の“桜”の少女が綴る黙示録。

第1話：Prologue - ? -

とある敗者達の黙示録

Prologue - ? -

一、湯島昌一

日々、朝の洗面の度に『昔はこうじゃなかった』と悔恨させられる
頭部の後退具合だけでも歳を取りたくないと思うのに、“警備員”
の適性検査結果にまでそれを突き付けられるとは。

教卓に着くなり大きく溜息を吐き出した湯村昌一の耳に「お疲れですか？」という職員室には不釣合いな幼い声が届く。

座っている湯島と同程度の低身長だけならまだしも、その容貌をどう見ても小学生にしか見えない少女だった。しかし、それに気分を害する必要もなく、生徒達には“鬼瓦”と評判の厳しい容貌を出来るだけ穏やかにして笑った。それが出来るのは数少ない歳を重ねた成果だろう。

「いやいや、お恥ずかしい話です、月詠先生」

「湯島先生のお歳で“警備員”のお仕事は大変なんじゃないですか？そろそろ勇退なさっても……」

こくりと小首を傾げる様は何とも愛らしく、妻なし子供なしの甲斐性無しの男にも一抹の人生を振り返らせる所作だったが、これでも立派な大人の女性である。しかも、重度の愛煙家であり、酒豪という話だ。しかも、教師としての評価も頗る高く、生徒からの信頼も厚いというのだから人は見掛けによらないものだ。

何処か自身にも適当なその感慨も含めて、微笑笑を浮かべてみせる。

「まあ、適性検査はギリギリ受かっていますし、体にガタが来るまでは頑張りますよ。“風紀委員”^{ジャッジメント}が我々の現場にしゃしゃり出てくるようでは」

自分の言った言葉に鋭い針で刺されたような不快感が胸に広がるが、それも歳のせいだといつもの諦念で誤魔化す。

“警備員”と“風紀委員”。世間一般に認知されているそれとは実情が異なるのが、この『学園都市』という場所だ。

一昔前ならば、眉唾物だった超能力等というものを科学の力で解明し、それを人工的に開発・研究しており、日々能力を開発している学生が人口の八割以上を占めるといふ学生の街　すなわち、読ん

で字の如く学園都市という事だ。
最も、能力を使用する事が出来るのは能力開発を受けている学生だけであり、湯島は勿論、月詠小萌でも不可能であり、能力開発について教育している教師側が能力を行使する事は出来ない。

これがどれだけの齟齬を引き起こすかは説明する必要性すらないだろう。

精神的に不安定な未成年がその気になれば、軍隊顔負けの力を個人的に発揮出来るのだ。

当然、その対策も必要になってくる。

簡単に言えば、学生側の抑止組織が“風紀委員”であり、教師側の抑止組織が“警備員”という事も言える。

だが、“風紀委員”は基本的に学校内が管轄であり、一步外に出て問題が発生すれば、その領分は“警備員”の管轄だ。
だが、それも完全に機能しているとは言い切れないのが実情ではあり

「まったく、困ったもんですな」

厳つい顔の割りに物腰が低く、“警備員”でもやっていなければ生徒にも舐められる無能な教師を演じて、湯島は破顔した。

それで世間話も終わり、教卓の上にある茶でも啜ろうかとした時。

「失礼します」

抑揚の欠けた声が職員室の団欒を掻き乱し、湯島と小萌の視線が声の方へと注がれる。

戸口に立っていたのは中肉中背に黒髪という何処にでもいそうな男子生徒だが、その目付きは鋭いを通り越して邪悪と言っても良い三

白眼。しかも、濁った黒目は死んだ魚のように無気力だった。

「結城ちゃん、待ってましたよ」

につこりと微笑んだ小萌に呼ばれた結城誠司をちらりと覗き見た湯島は内心に猫を被るならもう少し要領良くしろってんだ、とひっそりと胸中の悪態を茶と一緒に飲み込んだ。

まあ、どう取り繕ったとしても娑婆には溶け込める事の出来ない目付きの悪さの前では小手先の愛想等無いほうが良いのかも知れない。愛想を振り撒く邪悪な小童を想像し、その可笑しさと気色悪さに嘖出して笑いそうになった湯島は茶を啜って誤魔化す事にした。

自分の才能の無さに絶望し、無気力になった最低のレベル0。それがあいつが今被っている仮面なのだろう。

愛想を振り撒く野良犬なり、負け犬は哀切も通り越して、いつそ喜劇だ。

“負け犬”には相応しいだろ？

あいつの口癖を思い出し、“負け犬”か、と胸中にごちる。

自分達を評するにこれ以上ないその言葉の感触が胸をざわざわと騒がせ、思わず皮肉に胃が捩れそうになった。

「結城ちゃんは、AIM拡散力場がちゃんと計測されているんですから努力を怠らなければきっと結果は付いてきますから」

「……………はい」

無気力を装った声の裏側で『うぜんんだよ、合法ロリが』という声が聞こえてきそうな皮肉に歪めた唇が似合うその横顔を覗き見て、湯島は若さだと唐突に感じた。

装った無気力という皮膜を裂いて匂い立つその暴力的なまでの激情も、それを制御する術を持ち合わせていないのも若さであり、据えて萎え切った老体には毒だとしても羨望も感じてしまうのが湯島の偽らざる心境だった。

昔培った嗅覚でそれを鋭敏に感じる湯島とは異なるものの、結城の内に潜む無気力とは対極の熱を小萌も感じているからこそ、熱心に指導するのだろう。

と、そこまで考えたが、単純にこの幼女のような教師は単純にお人好しなのだ、と思考を瓦解させる。

そして、長生きは出来ないな、と昔の習い性で唐突に浮かんだ感慨を紛らわせるようにして再び視界から二人の姿を消した湯島はメモ帳を引き千切り、それに必要事項を記してから小さく折り畳んだ。
あとは

「そつだぞ、結城。勉強は学生の本分だぞ」

会話の合いの手のように机の上で作業をしているように見せ掛けながら、言葉の中に符丁を紛れ込ませる。視線は結城にも小萌にも決して向けない。だが、今までも何回と繰り返して来た符丁に結城が気づかない訳がない。

「……………はい」

いつもの無気力を装った声が背中を叩く。そして、いつものように

適当な理由を付けて退席しようとする結城の拳動に合わせて、湯島はわざと「おっと」と叱責を零しながら、持っていたシャーペンを床へとそれとなく転がした。

無言でそれを拾い上げ、湯島の前へと差し出す結城に「おう、すまん」と横柄な態度でそれを受け取り、それよりも何千倍も鋭敏に研ぎ澄ました“負け犬”ではなかった頃のセンサーを働かせ、小萌の注意が注がれていない瞬間に素早く先程書いたメモ帳を結城の掌の中に押し込んだ。

結城も結城で素早くそれを拳の中に隠し、無言で退出していく。

その後姿を思わず見詰めてしまう。

この歳になつても誰かを便所に呼び出す己の無様さは屈辱も通り越して、滑稽ですらあった。

狩りを忘れて久しい“負け犬”には似合いの姿ではあったからだ。

二、結城誠司

無気力を装った仏頂面の裏側の筋肉が皮肉で顔面痙攣を起こしかけているのを感じて、堪らず結城は「面倒臭」と小さく毒吐いた。

利害等最初から無頓着な徹底した善意。それは未だ己を雁字搦めに縛る柵には直接的に関係なかったとしても、それでも思い起こさせる。

優しく、それでいて凜として微笑んだ横顔と　そして、悔恨の象

徴である桜色。

教師という立場が“あの女”と同じだからこんなにも強く思い出させるのか。

それともその髪色が“彼女”を思い出させるからか。

その感慨に結城は堪らずに喉を鳴らして笑った。

“負け犬”らしく、尻尾を丸めて感傷にでも浸るのか。

己に言い聞かせ、それも悪くないと思う一方で、そんな風に楽で器用な逃げ方が出来るのならばこんな事は最初からしていないとも思う。

そんな慨嘆で思慮に終止符を打ち、代わりに拳の中にある紙切れに意識を向ける。

拳の中に書かれている紙切れにはどうせ、どここの便所に来い、とでも書かれているのだろう。“警備員”であるのだけが取り得の使えない無能教師が湯島の一般的な評価なのだろうが、喰えない狸なんてものではあの男は済まされないのだから。

結城の湯島への評価が正しかった事は離れた棟の便所で開口一番に、「時間は守れ、糞ガキが」と罵られた事で簡単に証明された。無能教師の仮面をいとも容易く捨てて、冷徹で人を塵のように見下す下卑た瞳の感触に結城も無気力の仮面を捨てる。

「おっさんと違って狩りの時間が浅かったからな。骨身にまで時間厳守が染み付いてねえんだよ」

「また、“負け犬”か？」

よく言う、と呆れた溜息を吐く湯島に結城は、唇の端を陰険に歪めてみせる。

「ああ。でも、地獄から逃げ出した訳じゃないぜ」

赦せないものがあつたから　と、いうよりも赦せるものの方が少なかつたから。

「“負け犬”に喉元食い干切られる屈辱を味合わせる為にな」

「……話半分に聞いとくさ」

湯島の溜息が安い芳香剤の香りで充満しているトイレの空気を掻き回す。

流石にもう二年近くになる付き合いという事だ。

復讐　そんな気持ちもなくはない。ただ、“あいつ等”に対して

“負け犬”なりに間尺を合わせてやりたいだけでも言える。

眇めた相貌に叱責を塗して、「で、内容は？」と続きを促す。ここから先は仕事の話だ。

「対象の無力化だ」

狩場に居た頃と同様の無機質で排他的なその硬い声音と語感に我知らず神経が鋭敏に研ぎ澄まされていく。

渡された写真に映し出された容貌と背景資料、そして偽造されたと思われる“風紀委員”の腕章を受け取り、「……毎度毎度の悪食だな」とにやりと険悪に笑む。

「汚れ仕事と危険な仕事位しか回ってこないんだよ……辞めとくか

「？」

暗い穴のような二つの瞳に不意に人肌の光が宿る様を見付け、結城は視線を外して喉を鳴らして嘲った。縮めようとする距離感に対して、侮蔑するように「まさか」と吐き捨て、資料を押し返す。無力化という硬い語感の中に込められた絶対的な排他性を呑み込んで、想い出の桜色がどす黒く変色して、血の色に変わっていく。

「顔も名前も知らない奴を無力化する位朝飯前だ」

“風紀委員”の腕章をひらひらと振り、それを制服のポケットに押し込んで踵を返す。

「だから、誠司。お前は優しすぎるんだ」

哀れみを含んだ湯島の声が背中を叩き、逃げ出した己の無様を突き刺すが、それでも結城は歩を進めた。

『結城』ではなく、『誠司』と二人きりの時は彼は自分をそう呼ぶ。『結城』と呼ぶ時は仕事だという符丁だった。

しかし、それ以上に過去を想起させる誠司という呼び方が気に入らず、後ろを振り向けば声同様に哀切を含んだ瞳を見返す羽目になり、後悔させられる事になった。

資料に目を通さない理由がそういう事だろう、と言外に告げた湯島は、やはりかつては狩る側だったという事だろう。それが例え、過去形だとしても。

それに比べ、自分は常に狩られる側だったという事だ。今は、ただ共食いの真っ最中というだけで。

「だから、俺達は“負け犬”なんだ」

狩場から逃げ出した老犬と踏み躪られる事に慣れ過ぎて、感覚が鈍磨した生来の負け犬。

塵溜めの闇の中、駆けずり回って野垂れ死ぬのが相応しいのだ。

優しいのではなく、ただ只管に弱い人間なんだよ、と言葉にせずに思惟だけを背中越しに向けて、結城はトイレの戸を潜った。

無気力の仮面を被り直す寸前、皮肉も不遜も作用せず、ただ傷付いた野良犬のような孤独感に揺れる哀切が心も揺らしたが、きつと気のせいだと思った。

窓ガラスに映る自分の茫漠とした容貌は無気力そのもので、瞳は死んだ魚のようだったから。

三、桜坂彩

「桜坂さん」

呼ばれて振り返った桜坂彩は自分を呼び止めた相手を認め、微笑んだ。

「初春さん、お久しぶりです」

桜坂の前に現れたのはセーラー服に身を包み、右の二の腕付近には“風紀委員”の腕章、そして、黒髪の上に花の冠　というより生け花でもしているような　を被った初春飾利だった。

同じ“風紀委員”同士、何度か仕事を同じにする内にこうやって街ですれ違いそうになると声を掛け合う程には親しくなった。

「この人込みの中、よく私がありましたね」

「そりゃ、桜坂さんは目立ちますから」

歩く生け花状態の初春に言われると複雑な気分だったが、他意なく柔らかく微笑む初春の容貌と肩口にさらりと触れた自身の髪に桜坂は苦笑で答えた。

目立つ理由は、名門常盤台中学の制服に身を包んでいるからだけではなく、その名門常盤台中学でも有数の高レベル能力者というからだけでもなく。

桃色がかったブロンドの髪を背中まで流し、翻る様はまさしく舞い散る億万の桜吹雪。桜坂の姓そのものの自分の髪色が原因だった。

先祖に外人の血が混ざっているのか、どんな遺伝子の悪戯か。とにかく染色した訳でもなく、桜坂のこの髪色は生まれ付いてのものだった。

同年代の少女に比べても色白な肌はやはり白人種の遺伝子が少なからず混ざっているせいなのだろう。先祖に外人がいるとは桜坂自身聞いた事がなかったが。

「それに“風紀委員”の中でも桜坂さんはトップレベルの能力者ですから」

「……私よりも仕事の出来る能力者の方はたくさんいると思いますけど」

謙遜ではなく、本当にそう思うのだが、初春は「またまた」と冗

談でも聞き流すように笑うだけだった。

自分よりも仕事の出来る能力者など幾らでもいる。

例えば、稀少な“空間移動能力者”であり、同時にレベル4の実力を有する白井黒子。捕まったが最後、肉体も精神も切り刻んで再起不能にする腹黒お嬢様、と犯罪者の間では畏怖を込めて噂される程で、しかも、彼女の隣には高確率である《超電磁砲》レベルガン 御坂美琴までいると言っただから確かに畏怖の対象にもなるだろう。

その他にも身体検査ではレベル0の無能力者と判断されておきながら、事実上はレベル4にも匹敵する能力を持つ規格外、南森勇という者もいる。

実際、今目の前にいる初春にしても、能力的にはレベル1程度だが、そのハッキング能力は、学園都市の中でもトップレベルという話だ。確かに自分の能力は汎用性に富んだ能力だとは思うが、人の価値を決めるのは決して能力の上下ではないはずである。

と、突然鳴り出した携帯電話の着信音にマナーモードにセットしていなかった事を「すみません」と謝ると。

多少のタイムラグを置いて、今度は初春から携帯電話の着信音が響く。

その事実にはつと何かに気付いたように容貌に緊張を走らせた初春に妙な表情で桜坂も一つ頷く。

“風紀委員”である二人の携帯電話が同時に鳴り出すというのは、つまり緊急性を持った事案が発生したという事だ。

予想通り電話の相手から告げられたのは(“警備員”と“風紀委員”は至急現場に急行せよ)という命令だった。

しかし、公には校外は管轄外であるはずの“風紀委員”に対しても召集命令が下されるのは尋常ではない。言い知れない緊張感にしんと静まっていく胸の内を感じながら、桜坂は「分かりました」と受話器に吹き込み、携帯電話をしまった。

「初春さん、私は先に行かせて頂きますね」

「え、でも、現場はここからは結構離れてるんですけど……！」

電話口の相手に巻くし立てられているのか、携帯電話を耳に当てたまま、慌てている初春にくすりと微笑を返す。

「これでも私はレベル4の“空力使い”^{エアロハンド}ですから」

その言葉を合図にしたように桜坂の周りの空気が踊る。

桜坂は当然、視覚的にその空気の流れを見る事が出来たが、桜坂の能力の場合、初春でもそれを視認する事が出来た。操られた空気の流れをなぞるように桜色の髪が舞い踊る様は優雅な演舞のようですらあったからだ。

たん、と軽く地面を蹴った桜坂の華奢な体はその瞬間、絶対であるはずの重力の束縛すら断ち切って文字通り彼女を飛翔させる。

空気の流れを操作し、丁度靴底付近に圧縮された空気の塊を作り出して、それを破裂させる。その瞬間、能力で操作された空気の塊は刹那の時、限定された空間においてだけ、高性能爆薬の爆発にも匹敵する爆風を作り出す。

それらの衝撃のベクトルを操作すると同時に航空力学に沿った見えざる空気の翼を形成する事によって、桜坂彩は最大時速三百キロメートルもの速度で空を翔る事が可能になるのだ。

見る見る高度を上げ、地上数百メートルにまで達すると既に初春を確認する事は出来ず、超高層ビル群すら辿り着けない無辺の天空へと桜坂を誘う。

こうなってしまうえば、後は航空力学に沿って見えざる空気の翼を形成、変節させながら、滑空するだけになる。

夕闇に差し掛かった最後の残光で光輝く無数の尖塔と化した巨大ビル群。

能力の高低が人の優劣を決める訳ではないけれど。

それでも、この光景を見る事が出来るのは自身の能力のおかげなのだと思うと、桜坂は罪悪感と昂揚感が緋い交ぜになったような不思議な気持ちにさせられるのだった。

n e x t

第2話：Prologue - ? -

とある敗者達の黙示録

Prologue - ? -

周囲五百メートル付近を“警備員”と“風紀委員”によって完全封鎖された第七学区の一角は厳戒態勢そのものであり、鼠一匹漏らさない程だった。

対弾対刃用ベストと戦闘服を着込み、“警備員”としてのフル装備をした湯島はフルフェイスのヘルメットの中で「……こいつは尋常じゃねえな」とごちた。

第七学区全域の“警備員”と“風紀委員”に非常招集を掛けるのも

異常なら、戦時中の不発弾が発見されたエリアの完全封鎖、などという命令でここまで嚴重極まりない態勢を敷くのも異常だ。

張り詰めた緊張感は現場に付き物だが、これは緊張感などという生易しいものではなく、いつそきな臭いと言った方が正確だった。

現場慣れしている“警備員”の中にもそれを嗅ぎ取っている者もあり、独自に情報収集に動いている者もいるらしいが 恐らく、無駄だろう。

こりゃ、今回はマジで当たりくじを引いちゃったかも知れねえぞ。

かつての経験を想起し、ぞっと肌を粟立てる。この状況はかつての狩場を想起させるに十分だったからだ。

夕闇も既に闇夜に差し掛かかり、嚴重な警備体制を潜ったすぐ先では人気は絶無であり、文字通りの学園都市の暗部が音もなく、広がっているのかも知れなかった。

「状況はどうじゃん、湯島さん」

掛けられた声に内心でぎょっとしつつも、表情は全く変えずに湯島は声を掛けてきた女性を見遣った。

独特の口調に艶やかな黒髪を束ねた美貌を持つ女性を知らぬはずがなく、危険信号が胸の内では灯るのを感じつつ、「これは黄泉川さんと頬を緩めてみせる。」

「変化はありませんよ。完全封鎖、現場待機。全く、ボランティアだと思って好き勝手やってくれますよ」

草臥れて、愚痴を零さずにはいられない無能中年を演じた湯島だったが、黄泉川愛穂はくすりと微笑を零し、「……いざと言う時は頼りにしてますよ」と湯島に聞こえるだけの小さな声で囁くだけだった。

た。

猜疑心とも違うが取り合えず、警戒心を抱かせるには十分過ぎる含んだ黄泉川の視線に不味いな、と内心で舌打ちをする。

高レベル能力者ですら容易く無力化する事が出来る彼女にはかつての経験があつたとしても、肉体的に当の昔にピークを過ぎている湯島では手も足も出ないだろう。

「膠着状態に業を煮やし始めている者も出てきてるじゃん。しかも、戦時中の不発弾じゃなくて、実際はテロ事案だって話も……」

声を潜めて話す黄泉川にぎよつとなりつつも、「まさか」と口走るが、「噂じゃん」と冗談とも本気とも判別出来ない笑みを浮かべられる。

カマを掛けられたか、と内心で思うものの十分予期していた為、下手な対応はしていないという確信が湯島にはあつた。

だが、気になる話ではあつた。

いつまでも膠着状態が続いている現状に対して不満と不安を“警備員”と“風紀委員”が感じないはずがない。煮え切らない上の対応に、騒がしくなっても可笑しくない状況でありながら、きな臭さすら纏った緊張感は容易に一手を打てない状況を作り出している。

本当にテロ事案が起こっているように。

それに湯島は内心で舌打ちをする。

学園都市暗部がどんな下手を打ったかは知らないが、現場の“警備員”にそれを嗅ぎ取らせるとは。

外部から進入した所属不明のテロリストの無力化　つまり、抹殺が湯島と結城の仕事の内容だ。

暗部が裏側で暗躍するのは学園都市の闇の常とは言え、この余りの手際の悪さは気になる。そして、外部の所属不明のテロリスト。

そこまで考えて、湯島は思考を思わず停止させた。脳裏に過ぎつたある仮説に、まさか、と内奥で呻くものの、即座に否定する。

有り得ない。

そんなのは御伽噺、下らない妄想の産物でしかない。

現に、自分達の部隊が壊滅して以後は、引き継いだ部隊も存在していないはずだ。

しかし、予期しない“警備員”と“風紀委員”による厳戒態勢とかつての狩場を彷彿とさせるきな臭さ。

そして、現役時代ですら数度しか嗅いだ事のない次元そのものを異にする寒気を覚えながら、“風紀委員”に偽装し、潜入しているはずの結城を思うしかなかった。

闇色に覆われた文字通りの学園都市の暗部を見詰め、湯島は黄泉川の前で舌打ちを堪えるのに苦慮しなければならなかった。

外へ目が向いている時は、内には目が向き難い。

“風紀委員”の腕章が物を言い、召集された本物の“風紀委員”共々人払いの為に配置に付き、隙を見て抜け出して、厳戒態勢が敷かれ完全封鎖されている第七学区の一角へと侵入する事など容易だっ

た。

「風紀委員」様々だな」

人気の無くなつた無人の通りを歩きながら、夏制服の右腕にある“風紀委員”の腕章を指で弾く。

普段ならば人で溢れている通りは完全に無人であり、人はおろか、車の一台も通行する事はない。

梅雨もまだ明け切らない湿つた空気を掻き乱すようにくるくると音も無く回っている風力発電の風車。きん、と耳が痛くなるような無音に結城は皮肉ではなく、残酷で陰険な笑みを口元に貼り付ける。

馬鹿馬鹿しくなる程に都合が良かった。

学園都市に住む学生は能力の有無はともかくとして、全てが育脳を受けており、それは結城も変わりがない。つまり、結城も能力者である。

その能力の使用の感覚という奴は人それぞれ千差万別あるのだろうが、結城の場合はちょうど拳銃のそれに近い。

頭の中にある撃鉄を起こし、弾丸を装填し、引き金を引く。

撃鉄を起こす 『自分だけの現実』を現実干渉させる。

弾丸を装填する 現実に作用させた『自分だけの現実』の影響、効果、範囲を演算し、その構築式を編み上げる。

引き金を引く 『自分だけの現実』を現実へと変換する。

これら一連の流れをスムーズに行う事によって、初めて能力は発現すると結城は思っていた。そう強く感じるのは、結城の能力 《

オシリ・ロンリー・クローリー
《天上天下唯我独尊》が極めて使い辛い欠陥能力だからだろう。

だが、状況から推察するにその欠陥能力が今日は珍しく発動条件を満たしていた。

嵌める事さえ出来たならば、全ての者を“負け犬”へと蹴落とす能力。

四車線の道路を横断する歩道橋の上。満月を背に佇む者を見上げ、結城は月光に濡れて輝く投擲用ダガーを逆手に握る。

真っ黒な外套を着込んで、目深に被ったフードは、真夏を直前に控えた今の季節を考えれば、奇異に映ったが仕事に私情を挟む程ではない。

険悪で陰険、邪悪そのものの笑みを浮かべて、精一杯の虚勢で出来損ないの死神を演じる。

お互いの距離は高低差を差し引けば、約五十メートル。全力で駆けて有効射程に入るまでに約五秒。

制服のズボンの裾に隠してあるアングレットホルスターに入っている拳銃を取り出した所で、『素人が目を瞑って撃った方がマシ』と揶揄された程の腕では到底当てる事は出来ないだろう。そんな代物に頼るよりも信頼を置くものが右手の中にある。

挨拶は撃ってから。

かつての教訓が胸中から浮かび上がった瞬間、脳髓の一部が黒くどろりと溶けたような感覚がした。

憎悪、殺意、悪意、敵意。

名前は何でもい。とにかく人間が抱く真っ黒な感情そのものが汚

泥のように大脳を浸していく。人倫も善意も片っ端から食い干切るそれは、コンマ一秒にも満たない時間で目に映るそれを人ではなくしていた。

がちゃん、と頭の中の能力発動とも直結した殺人の撃鉄が跳ね上がる。と、同時に両足に力を込めて、駆け出していた。

悪意を込めた弾丸を装填し、同時に掌の中で器用に投擲用ダガーを逆手から順手に持ち直す。

そして、言の葉という引き金を引くのと同時に投擲用ダガーを振り抜く。

宙を切り裂く投擲用ダガーよりも余程速く、光速すら超越した速度で撃ち放たれて飛翔した弾丸 《天上天下唯我独尊》は、人ではなくなっている者を更に“負け犬”へと蹴落としていた。

そして、それよりも遥かに遅く投擲用ダガーは“負け犬”の太股へと深々と突き刺さっていた。

初めて耳に届いた苦悶の声 男か女かの判別もどうでもいいその声が無人の街を響かせる。だが、“負け犬”は倒れる事すら出来ない。

そういう風に既に『自分のだけの現実』が現実を歪めてしまっているのだから。

だから、結城は険悪に容貌を歪め、宣告する。

「……………これでめえも“負け犬”の仲間入りだ」

《天上天下唯我独尊》の持続時間は一分間。この状況なら歩いて行っても十分お釣りが来る。

時間の余裕はたっぷりある。

そのはずだった。

「あー、出来ればその辺にしておいて欲しいんですけどー」

場に不釣り合いな間延びした男の声が結城の耳に届いた瞬間、現実を歪めていた『自分だけの現実』が現実の圧力に競り負けて、自分だけに聞こえる音で砕けて散る。

どさり、と糸の切れた操り人形のように倒れた獲物の様子に苦く歯噛み、結城は声のした方を見上げた。

ネオンに彩られた不夜城を覆う漆黒の闇。その中天を茫漠と白く輝かせる満月の中心で宙に佇む少年は飄々と微笑んでいた。

呆気に取られたのは一瞬未滿。だが、結城が動く前に確かに何かは空気を震わせて動いたのを知覚した。

「なっ………!?!?」

思わず声を上げる不手際を演じる羽目になったのは、結城の周囲十メートルに渡って、突然、アスファルト片が砕け散ったからだ。それはまるで見えざる無数の何かが一斉に地面に向かって降り注ぎ、突き立ったかのように。否、その判断は間違っていないだろう。

能力者、と相貌を眇める。

月光を遮る雲が逆光で遮られていた少年の容貌を露にさせ、結城は少々うんざりとさせられた。

身に纏っている制服は結城のそれと全く同一。右腕に巻かれた“風紀委員”の腕章すら同じ。

寝癖のような無造作な髪が夜風に揺れ、好奇心と希求が緋い交ぜになつて輝く瞳の印象も相俟つて、猫科動物の印象を強く受けるが。それは飼い猫の類ではなく、肉を喰らい、血を啜る猛獣へと繋がる獅子の瞳だった。

レベル0の無能力者でありながら、レベル4に匹敵する能力を有する“風紀委員”の規格外。

その能力は『空間固定』。その通り名は《サインレス指標無し》。

「……南森勇」

「僕も一応、君の名前を知ってるよ。同じクラスだし、ね」

柔らかく苦笑した南森の容貌に一瞬の哀切が過ぎり、それはすぐに飄々とした微笑みの中に消えた。

「結城誠司、出来れば手を引いてくれないかな」

「断つたら？」

「戦う事になる」

即座に返された声と変わらぬ微笑みに結城は取り敢えず、生まれ変わったとしても友達にはなれない類の相手だ、と南森勇に関する評価を飲み込んだ。

その理由を尋ねられれば、「猫は好きじゃないから」と答えている所だ。獅子の子と負け犬が仲良くしている図など想像も付かないからだ。

不遜に冷たく笑んだ結城は制服の開襟シャツの下に隠してある腰ベルトからナイフを抜き取り、その刀身を月光で冷たく濡らした。空気中の粒子すら切り裂くような刃の輝きと重さが雑念を追い払い、狩場から逃げ出す前の感覚を甦らせる。

如何に相手を効率良く無力化するか。それ以外、考えられなくなる。《天上天下唯我独尊》を封じられた状況で、レベル4並の相手と殺し合う等、素手で戦車に挑みかかるような暴挙だろう。

じり、と靴底が砂を噛んだ瞬間。

何の準備もなく、いきなり結城の周囲の地面が爆ぜ、衝撃と爆音が全身と中耳を貫いた。

平衡感覚が一瞬で奪われた体たらくに毒吐く余裕もなく、咄嗟に頭部を守るように両腕を掲げる。

どん、と衝撃が両腕に走り、骨の内側が軋む音を聞きながら、結城はアスファルトの地面を転げ回る羽目になった。

上下左右も分ならず、自分の手の付いているのが壁なのか、地面なのかも分からない。

脳震盪を起こしているのか、気分が悪い　吐きたい。

そう思った瞬間、胃の中の内容物が逆流し、堪らず結城はその場に激しく嘔吐した。

脈打つ度に痛む頭と胃酸でひりひりと痛む喉に苛まれながら、結城は何故か笑んだ。

こりゃ、勝てねえな。

負け犬よろしく、敗北も屈辱も呑み込んで。

張る意地もなければ、急速に真っ暗になっていく視界に抗う必要性すらなく、酷く簡単に結城は自身の意識を手放した。

この一部始終をもしも相棒が見ていたなら、「滅茶苦茶だし」と呆れ果てていた事だろうと南森自身思った。

降り注がせた固定化された空気の無数の刃を破裂させ、擬似的な閃^ス光音響手榴弾と同様の効果を与え、対象を無力化した上で排除する。

「ま、戦いつて言うのは非情なもんだし〜」

言い訳するように相棒の口癖を真似て、一人肩を竦めて見せる。今はそんな事をして、アイアンクローや^レ固めをするような相棒もいない事だし。

地面に倒れている結城誠司を見下ろし、それに、と口の中でその感慨を転がす。

南森の視線の先にはこの騒動の発端である一人の魔術師が今も歩道橋の上で苦悶に喘いでいる様が見て取れた。

科学技術全盛の学園都市にあつて、文字通り異端を体言し、世の理の裏側で暗躍する者 魔術師。

そんな輩が何故、科学側の旗手である学園都市に潜入しているかはその傍迷惑な上に独り善がりな信念と勘違いした妄執に獲り付かれているからだろう、と溜息を吐き出す気力も沸かない位に下らないそれに魔術側に片足半分突っ込んでしまっている自分にお鉢が回ってくるのだから、本当にしようもない、が。

それでも、この魔術師の力量は『学園都市』に潜入し、喧嘩を売るうとしてくるだけの事はあるはずなのだ。少なく見積もっても、レベル3以上の能力者程には。

だが、その魔術師をこの少年はいとも容易く致命傷を与えて、行動不能にしているのだ。

結城誠司。レベル0の無能力者が、である。

まさか上条当麻のように《幻想殺し》を持っている訳ではあるまいし。

簡単には答えの出そうにない疑問を取り敢えず先送りにして、南森はがりがりとう頭を掻いた。

「それより早く僕の仕事を終わらせようか、と」

歩道橋の上に血溜りを作って足掻いている魔術師を見下ろし、能力を発現させようとした瞬間、水風船を割ったような音と共に魔術師の頭が砕け散った。

現場に急行した桜坂も他の“警備員”や“風紀委員”と一緒に厳戒態勢の下、現場一体の封鎖に協力していた時、スカートのポケットに入れていた携帯電話が着信を知らせて震えた。ディスプレイに表示されている番号は見慣れず、眉を顰めながらも携帯電話の通話ボタンを押す。

「……もしもし？」

（あ！ 良かった、出てくれた！ ちょっと頼みたい事があって…

…)

勝手に用件だけを言って、自分の名前も名乗ろうとしない相手に嫌悪感を頭にさせ、桜坂はこの不躰な相手に対して低い声で誰何した。

(あ、ごめん、僕は南森。“風紀委員”の南森勇！)

「……………何故、あなたが私の電話番号を？」

(そりゃ、椎原に聞いて……………って、ちよつと今忙しくて、頼みたい事があるんだけど……………！)

飄々としたお調子者の南森の容貌を思い浮かべ、桜坂は少しげんなりした。生真面目な桜坂にとって、南森の態度を好意的に見る事は出来なかった。例え、その実力は認めていたとしても。溜息を相手に聞こえるように吐き出し、「用件とは？」とわざと刺々しく尋ねれば、返答はとんでもないものだった。

(第七学区の事件、知ってるよね。僕、今、その封鎖されている中にいるんだけど)

「は？あ、あなた、一体何を……………？」

(そこで容疑者ってか、関係者をひとり捕縛したのは良いんだけど……………！くっそ、何だってこんなに正確なんだよ……………！?)

飄々とした南森の態度には似合わない焦燥に駆られた声に、初めて桜坂は気が付いた。

南森の後ろで激しく何か弾ける音が断続的に続いている事に。携帯電話越しだとしても、空気を切り裂く音は高レベルの“空力使用”の耳を誤魔化せるものではなく、狙撃と冷たい感触を胸に広げた。

「あなた、狙撃されているのですか？」

(本当、手間が省けて助かるよ。君に電話して正解……………！テロリ

ストは誰かに狙撃されて即死で、僕はその狙撃犯を追わなきゃならないから)

「テロリスト……!?!」

思わず、大きな声で叫んでしまった事に気付き、辺りを見回す。幸い、桜坂の言葉を聞いていた者はいなかったようだ。

「どういう事ですか。これは、戦時中の不発弾の為の現場封鎖ではないのですか？」

(取り合えず、説明は後でさせてもらおうから)

電話越しの南森の言葉に桜坂は頭が痛くなった。これはもう既に“風紀委員”の権限を逸脱している。自分のような一介の“風紀委員”が介入して良いような事案ではない。

“警備員”に報告し、それから

「人の命が懸かっているんだ……!」

沈黙を逡巡と捉えたのか、電話口で南森の声が弾け、桜坂は我に返った。

「頼むよ、桜坂……! 君にしか……ザ、ザ……」

「え、も、もしもし、南森さん……!?!」

ノイズで聞き取り辛くなったかと思えば、ぶつりと唐突に切られ、受話口からは話中音しか聞こえなくなった。再度リダイヤルしようと思ったが、ディスプレイには無常にも 否、事態のきな臭さを物語るように電波が圏外を示していた。

地下街にも送受信アンテナを張り巡らせている学園都市で携帯電話が圏外になる等考えられない。もしもあるとしたら。

「……ジャミング？」

ぞっとする考えに夏を目前に控えた気温でも制服の下で肌が粟立つた。人の命が懸かっているという南森の言葉が桜坂の内奥で反響する。

そんな桜坂の背中を無理矢理押すように、やはり封鎖地域全域に対して、ジャミングが仕掛けられている事を物語るように“警備員”と“風紀委員”から無線が使えない事を匂わせる喧騒が徐々に不穏と一緒に立ち上り始めていた。

封鎖された無人の一角は、まるで桜坂を呑み込まんとするように漆黒の口を大きく広げているように見えた。

n e x t

第3話・Prologue - ? -

とある敗者達の黙示録

Prologue - ? -

七月十日午後八時十三分。

腕時計の時間を確かめた湯島昌一は、人知れず追い詰められていた。第七学区の一角を完全封鎖してから既に二時間以上。事態は混迷の色合いをいよいよ強めていた。突然の封鎖地域全域に対してのジャミングは“警備員”及び“風紀委員”の指揮系統を完全に麻痺させていた。

暗部の非公開組織による介入は、疑う余地すらなく、ここは既に連中の狩場だった。

既に闇夜に放たれているだろう獵犬を思い、老犬は強かにその双眸を細める。

暗部の中でも特に獵犬と対峙したならば、負け犬は必ずその喉笛に噛み付こうとするだろう。彼我の戦力差など度外視して、敗けると分かっているながら、それでも。

切り捨てるか、と内奥に呟き、あいつの不貞腐れて斜に構えた双眸を思い浮かべる。

だが、次の瞬間にはあまりの下らなさに一笑の中に掻き消えた。

狩場から共に逃げ出す事になる以前から　言うなれば、初めて出逢ったその時から、自分達は縛られたのだ、負け犬という名の鎖で。今更なのだ、と保身に走る必要性すらない空っぽの己を笑って、湯島は覚悟を固めた。

一蓮托生という言葉を出す。五十目前に迫った己の歳を振り返って、とんだ糞ガキを手元に置いちまったもんだ、と嘯いた。

納得とも諦観とも違う、覚悟という塊に脈動のような熱を纏う感情を腹に抱えて、人知れず、場所を離れた。停めてあるパトカーを見付け、中に鍵が付いている事を確かめて、運転手席へと乗り込む。その様子を訝しむ同僚や“風紀委員”がいない訳もなかったろうが、徐に取り出した煙草を口に運ぶ様をみれば、意識をそれ以上向ける必要もないのだろう、侮蔑にも似た視線を一瞥して尽く湯島の視界から消えていく。

グウタラで無能な“警備員”がサボって、煙草を吹かしていると思わせるには十分だからだ。

約二年の禁煙がご破算になったが、肺に入れた紫煙は堪らなく美味

かった。

煙草の味も酒の旨さも知らない若造が負け犬と自分を蔑んで、闇の中で野垂れ死ぬ。それも仕方がない道を歩いていると言えればそれまでだが

「……女も抱いた事がねえ糞ガキが生言ってるじゃねえよ」

紫煙と一緒に吐き出して、啞え煙草のまま、湯島はエンジンキーを回す。次の瞬間にはパーキングをドライブに入れ、アクセルを思い切り踏み込んでいた。

アスファルトを噛んだタイヤから摩擦熱でゴムが焦げた臭いを車内にまで届かせたが、それを感じたのも一瞬。

「おら、怪我したくなかったら、どけえ!!」

クラクションを盛大に鳴らし、湯島は“警備員”と“風紀委員”が封鎖しているエリアへの突入を敢行した。

それを認めた瞬間、桜坂は南森の口車に乗って、封鎖エリアへと足を運んでしまった事に後悔した。

能力によって高高度から封鎖エリアへと侵入した桜坂は歩道橋の上で赤黒いペンキをぶち撒けているような場所を見付け、焦点を絞り

そして、頭が半分以上吹き飛ばされた男の死体と思しきものを

見てしまったのだ。

瞬間、思わず能力制御を失いそうになるが、何とか気丈に能力を制御し、取り敢えず地面へと着地した。

即死、という南森の言葉を思い返し、抑えても込み上げて来る吐き気で容貌を青白くしながら、桜坂は出来るだけ歩道橋の方へは意識を向けないようにして、周囲を探した。

車一台通る事のない路上に戦闘と思われる痕を見付け、その付近で倒れている人も見付けた桜坂は、生唾を飲み下し、ゆっくりとその人へと歩を向け

「……………学生？」

埃塗れになって倒れている少年は桜坂と同じ年位の少年に見えた。黒い短めの頭髪や中肉中背の印象は何処にでもいる学生という印象しか受けない。

南森の言葉を信じるならば、彼がその死んでいたテロリストの関係者？

とてもそんな風に見えない少年の姿に、桜坂は無用心にも近付く為の一步を踏み出しており、呻くように身動きした少年の様子に心臓の鼓動を一跳ねさせる事になった。

薄らと持ち上がった瞼の下の瞳が揺れ　それはまるで捨てられた仔犬のように潤んでいた。

泣いている、と思ったのも一瞬で、「……………ごめん」と耳朵を震わせた少年の声に桜坂は思わず、声を漏らしていた。

「ごめん、 “ サクラ ” ……ごめんね」

“ サクラ ”　自分の事を言っているのだろうか。

ただ、謝り続けている少年の様子は、本当に捨てられ、傷付いた仔

犬のようで。

自分でも知らず知らずのうちにまるで仔犬に少しでも人肌の安心を
与えようとするように手を伸ばし、その癖の少し強い短い頭髮に触
れようとした時。

「まーさか、こんな所で“セルジユ”君に出逢えるとはねえ」

闇で蠢く羽虫を集めて声にしたような背筋を凍らせる男の声が耳朶
を震わせ、桜坂は容貌を振り向かせた。視線の先には蠢いた闇が人
型を作ったように異形と呼んで適切だろう姿をした者達がいた。

人の姿を判別する事がギリギリ可能な程、厳つい戦闘服に身を包み、
フルフェイスで容貌を隠している集団。だが、それよりも桜坂を震
えさせるのは、その中央で唯一容貌を顕にさせている男。顔半分に
彫られた刺青よりもその男の笑い方が桜坂を戦慄させる。

残酷、残忍という言葉をもそもそのまま人間にしたら、こういう笑
い方が出来て、こういう男になるのではないのか、と思える者。

「“ワトソン”は元気か。裏側でグチャグチャとやっていたみたい
だな。もしかして、俺達を追っていたのか」

「その名で俺を呼ぶな……木原……数多！」

すぐ傍で発した声にはつと振り向けば、傷付いた身体を無理矢理動
かすように起き上がる“セルジユ”と呼ばれた少年の姿があった。
その姿は仔犬などではなく、牙を剥く野良犬のような激しさで桜坂
は先程、泣きながら“サクラ”と呟き、謝っていた少年と同一人物
と思う事が出来なかった。

「俺は結城誠司　てめえら『ハウンドドック猟犬部隊』に噛み付く犬だ……！」

「あー、負け犬が吼えてるよ。ウザいから殺しちゃって、お前ら」
木原の周りに展開していた異形の人　　猟犬がその牙たるアサルトライフルの銃口を向ける。
不味い、と思った時には危機回避本能と直結した能力が発動しており、桜坂は両手を正面に向けていた。次の瞬間、自然界では決して発生しない　　爆発物の爆風に匹敵する暴風が前面に展開されていた。

「……能力者？」

「立てるのなら、早く逃げてください！」

「ふざけるなよ！　俺はあいつ等を……！」

「そんな事……！？」

言い終わるよりも早く二の腕付近を掠った衝撃に桜坂は思わず悲鳴を挙げて、後ろ向きに倒れこんだ。咄嗟に後ろに回り込んで受け止めてくれたのか、衝撃はそれ程でもなかったが、二の腕付近から流れている血にぞっとした。

「レベル4クラスの“空力使い”か。大したもんだが、それじゃ足止めにもならんぞ。どうせなら、真空の刃で木っ端微塵にする位のつもりじゃなきゃ、面白くねえ」

掌の中で拳銃を弄びながら、にやにやと笑っている木原に桜坂は恐怖心で震えた。

あの暴風の中、あんな拳銃で撃つたのか、と冷えた納得が驚愕と恐怖と共に込み上がる。

「怖いのか？」

当たり前の事を尋ねてくる少年　結城誠司は、そつと触れる両肩から震えを感じたのだろつ。強がろつとした所で、怖い。どうしようもなく、怖い。

「……当たり前です……！」

悔しくて。情けなくて。

恐怖とは違つ感情で震える自分の声が疎ましくて。

「そうか」

何かに納得したように小さくそう呟いた結城は、一瞬泣きそうになるように容貌を歪め、それを無理矢理笑わせたような痛そうな歪んだ表情を作つた。

「……卑怯だよ、あんた」

「え……？」

そんな彼の小さな独り言は、タイヤがアスファルトを切り裂く音に一瞬のうちに呑み込まれた。

突然現れたパトカーは、無人の交差点をドリフトの要領で回り、その姿を突然現したのだ。

「チツ……撃て！」

突然の事態に固まっていた猟犬がリーダーの一声でその牙を剥く。だが、一足遅くタイヤを擦り付けながら、桜坂と結城の前で止まったパトカーが楯になり、銃撃から桜坂と結城を守っていた。

運転席から徹つい男の容貌が覗き見え、「早く乗りやがれ、結城！」という胴間声が響いた。

その声に弾かれるように後部座席のドアを開け、桜坂の手を引いて二人で倒れ込むように車内に乗り込む。

「おっさん、出せ！」

「言われなくても出すさ、糞ガキが……！」

再びアスファルトを切り付ける音とゴムが焼ける異臭が鼻腔を貫く。不意に上げようとした頭を結城に無理矢理押さえ付けられた桜坂は文句の口を開こうとしたが、それも銃弾が掠め飛び、防弾ガラスに直撃した衝撃に晒されれば、無理な話だった。

「まったく、心配して来れば、女と宜しくやってるとはな……！」

「んな訳ねえだろうが。目標も仕留められず、南森の奴には気絶させられて、起きたらこの女と猟犬部隊が現れて俺だって訳分かんねえんだよ……！」

悪態の応酬の中でも手馴れた動作で運転席の男からサブマシンガンを受け取り、手早くセーフティを解除して、窓から身を乗り出して応射している様はとても学生には見えなかった。

「あ、あの……！」

「お嬢ちゃん、申し訳ねえがもう少しばかり身を低くしてくれや。迷惑掛けたくねえしよ」

運転席からひよっこりと顔を覗かせ、にんまりと笑ったその容貌は熊か狸を彷彿とさせた。

追撃の手も振り切ったのだろう。結城は座席に戻ると手早くサブマシンガンの弾倉を抜き取り、助手席に置いてあった別の弾倉を装填する。

「でも、何処から脱出するつもりだよ。この辺り全域は封鎖されてるんだろっが」

「手薄な所は予め調べてある。それでも強行突破は変わらねえがな……殺すなよ、誠司」

「俺の射撃の腕前は知ってるだろうが、牽制にしかないんだから」

「それも一種の才能だ……行くぜ、しっかり捕まってくれよ、お嬢ちゃん！」

追撃の手を振り切つて尚、一切緊張に緩みがない二人の様子理由が矢継ぎ早に応酬される悪態で理解出来たが、納得が出来る訳がなかった。

だが、納得も抗議も出来ないまま、再びジェットコースターと化した車内の中で桜坂は波乱に満ちた七月十日を思い、今日の運勢は間違いなく最悪だと心の中で叫んだ。

車窓から上半身を乗り出し、サブマシンガンの銃口を向けた結城は確かに封鎖という言葉ばかりの状況に険悪に笑った。

狙いは出鱈目。狙ったものには絶対に命中しない、した試しがない自身の射撃技能を嫌という程知っている結城は取り敢えず、牽制の意味で引き金を引き絞った。

悪運が強いというか、間が悪いというか。

放たれた弾丸の一つが停車しているパトカーの燃料部分に直撃し、引火したのか。火柱を立てて、吹き飛んだパトカーをぼかん、と眺めつつ、一瞬にして火の海の様相を呈し始めた状況に「こんのド下手糞！」という湯島の声と同時にパトカーが急旋回する。吹き飛んだパトカーをすれすれで回避しつつ、破れた包囲網を突き破ったパトカーが坂を超えて、一瞬飛ぶ。着地の衝撃に黄色い女の悲鳴と結城の悲鳴が融和する。危うく車窓から投げ出されそうになった身体を押し留め、後ろを振り返れば、まさに火の海。

「……おっさん、これ始末書で何とかなるのか？」

「馬鹿言え。犯罪者の仲間入りに決まってるだろうが」

「……だよな」

苦く吐き捨てるように言った湯島の声を受け、結城は視線を後部座席で頭を抱えて丸くなっている少女へ向ける。

桜色の長い髪だ。彼女が誰か、何者かなんて結城にとってどうでもよくなるその身体的特徴が無償に心を苛む。

気を緩めれば、「サクラ」と。思い出の中で結城を見詰める少女の名を呟いてしまいそうになる程に。

「だが、実はそうでもないんだな」

「え？」

現に戻される湯島の声に視線を向ける。

にやりと啜え煙草で笑った湯島をバックミラー越しに見詰め、禁煙は辞めたのかよ、と内心で言ってる。

「猟犬部隊が動いた時点で、学園都市統括理事会も動く。情報統制が敷かれ、テロ事案については綺麗さっぱり無かった事なる、その

為の不発弾騒ぎだしな。パトカーの爆発は……交通事故とか、そんな風にされるだろう。そして、俺達もその場にいなかった事になる」「とんでもねえな」

暗部の常とは言え、呆れて正直な感想を漏らした結城に湯島は「だが、それで助かったと思うんじゃないぞ」とすぐに釘を刺してくる。

「……分かってる」

後部座席のシートに身体を持たれ掛ける。

その場にいなかった事に 究極的には存在そのものの抹消というハードオブションすら考えられる。そして、そうなった場合、その矛先はこの桜色の髪の少女にも及ぶ。

そう言えば、さっきから何も言ってこないな、と不信に思った結城は隣で丸くなっている少女を見詰める。

伸ばし掛けた指先が彼女の桜色の髪に触れる寸前で、結城はその手を一瞬止めた。

触れて いいのだろうか、と。この血塗れの手で、“彼女”と同じ桜色の髪に。

意を決して、触れた髪をそっと掬ってみる。髪に隠れていた容貌が頭になり、穏やかに眠っているその様子に結城は我知らず安堵の溜息を零していた。

怖い、と。正直にそう吐露した彼女の声がなければ、きっと自分は死んでいただろうと思う。

自分の命が惜しいなんて、もう思わない。思っちゃいけない。

それでも、この桜色の髪が血に染まる様だけはもう二度と見たくはないのだ。もう二度と。

「……その子は？」

「さあ、気絶しちまつてるけど……“風紀委員”の腕章を付けてるし、この制服は常盤台中学のもんだろ」

「お嬢様って訳か。そりゃ、“偽装経歴”^{カバーストリー}が大変そうだな」

「“偽装経歴”？」

「そのお嬢ちゃんの死亡理由」

心臓を跳ねさせるには十分な湯島の言葉に結城は思わずその肩を思い切り掴んでいた。それで運転を間違えて、交通事故になるうが知った事ではなかった。

だが、湯島は表情一つ変えず、バックミラーにすら視線を向ける事無く、前だけを向いたまま淡々と話す。

「猟犬部隊はそういう所だ。秘匿が任務よりも優先される事が間々ある。俺達には、“保険”があるが、そのお嬢ちゃんにはそれがねえ」

「……てめえ」

肩に更に結城の指が食い込むが、見た目以上に張りのある肩は五十目前とは思えない程筋肉質であり、“警備員”の適正検査が合格ギリギリ等というのが冗談にしか思えない程だった。

「……だから、誠司。てめえは今日から“風紀委員”だ」

予想もしていなかった言葉が湯島の口から漏れ、結城は思わずその肩を離していた。

「“風紀委員”になれば、同じ“風紀委員”のそのお嬢ちゃんの傍にいても容易いだらう。猟犬部隊とは言え、常盤台中学内部で事

を起こすような馬鹿はしねえはずだから」

「……馬鹿言えよ……」

“風紀委員”になる為には、体力測定、精神鑑定、学科試験等の十三種類もの適性試験を通り、四ヶ月の研修をクリアしなければならぬ。

何を今更、という言葉は今まで一度も振り返らなかった湯島の容貌が振り返り、結城は思わず固唾と一緒にそれを飲み下した。

その目は久しぶりに見る瞳であり、狩場に居た頃 獵犬部隊に所属していた頃、非情な命令を下してきた上司の目だった。

「てめえと俺が“負け犬”なのは変わらねえ。だがな、“負け犬”なりに節を通せ。お嬢ちゃんはお前の為に身体を張ったんだ。そんな細い肩でてめえを守ろうと獵犬の前に出たんだ。そんな彼女から逃げ出してみろ、てめえは“負け犬”以下の畜生だ」

それは結城にとって、過去を糾弾する声にも聞こえた。

二年以上の付き合いになり、結城と湯島が獵犬部隊を離反する現場に居合わせていた だが、それでも。

その時、結城が何を感じ、何を思ったかは知らないはずだ。

だが、それでも、あの腐った免罪符を糾弾する声に聞こえて仕方なかった。

結城は隣で眠る桜色の眠り姫を見詰め、小さく拳を固める。

彼女の髪に触れた指先が発熱したように熱かった。穏やかと言って良いその容貌が“彼女”と重なる様を見て、結城は思わず瞼を固く閉じた。

「てめえが犬なら “負け犬” なら、彼女を守れ」

その言葉を最後に車内に沈黙が降りる。そして、それを待っていたとばかりに携帯電話の着信を知らせるバイブレーションの振動音が車内を掻き回し、結城は桜坂のスカートのポケットから覗く携帯電話のディスプレイに表示されている名前を確かめ、思わずそれを取っていた。

「南森勇か？」

(…………… 結城、誠司?)

驚いたような南森の声を聞いて、結城の中でパズルが組み立てられた。そういう事が、と納得しながら、その納得が灼熱の怒気を静かに孕んでいく。

「おっさん、行って欲しい所がある」

南森と二、三の会話をした後、携帯電話をしまい、結城はそう呟いていた。

湯島はそこで結城と南森が何について話したかは聞こえなかった。自分が所属している学校の生徒である事を鑑みれば、南森の前に姿を現すのは得策とは言えなかったからだ。

ただ、結城が南森を殴った事だけは見えた。

パトカーの扉に背を預け、煙草の紫煙を吐き出しながら、その様子を見守っていた湯島はちらりと車内で眠る少女　桜坂を見遣る。

因果なものだ、と思う。

もしも、この少女が桜色の髪をしていなければ、きっと結城は自身が望むまま、猟犬に挑み、そして野垂れ死んでいただろう。

結城を過去に縛り付けもすれば、生にも縛り付ける桜。

それは俺もか、と思慕を括った湯島の携帯電話が鳴り出す。この夕イミングに都合良く掛けてくる相手に湯島は煙草を靴底で揉み消し、開口一番に「えげつねえんだよ、糞が」と言っっちゃった。

(酷いな。これでも色々々と、手を打ったんだけどなあ)

「猟犬部隊が動く事くらい察してたんなら伝えやがれ。でなきや、てめえの“手札”がお嬢ちゃんを巻き込んだりする訳ねえだろうが」

(南森君の行動は僕も予想外だったよ。彼はああ見えて、使命感が強いからね。テロリストの素性に関しては、上が出てきて下っ端の僕にはさっぱり分からないけど)

やはり知ってやがったのか、と湯島は内心で毒吐く。

外部のテロリストの素性については、興味深いが、“電話の奴”よりも更に上が出張ってくる所を見ると核心を？む事は出来ないだろう。

「誠司が殺したのか？」

(いいや。正体不明の狙撃犯による犯行らしいよ。一キロメートルを超える場所から頭を一発で撃ち抜いているって言うんだから、猟犬部隊も真っ青だよ)

狙撃ライフルの有効射程を大きく超えるその言葉にぞっとする。

(桜坂彩についてはこちら側からも出来るだけ穏便に済ませられるようにするよ　君達と違って、“保険”がある訳じゃないから、手慰み程度だと思つて貰つていいけど)

「それについては、誠司を彼女の護衛に付ける。そういう訳で、俺ら“ダスト”は解散だ」

(……君達にはもう少し働いて欲しかったんだけど)とこいつにしては珍しく逡巡を含んだ言い方をして来たが、湯島の中でそれは決定事項だった。

(分かった。お別れの選別として、結城君を“風紀委員”として登録しておくよ。書類やデータベース等の偽造については、こちらに任せてくれていいよ)

「そうか……世話になったな」

(止してよ。“ダスト”の名は　そうだね、南森君にでも継いでもらおうかな。君達の事を忘れるのも忍びないから。それじゃ、湯島昌一さん、さようなら)

「じゃあな」

通話の終わりと同時に風が頬を叩き、それに紛れて結城の声が聞こえてきた。

「　あいつは、桜坂は、俺が守る」

その声を聞きながら、桜色の眠り姫を見遣り、湯島はもう一本煙草を啜えた。

自分と結城を過去に縛り付ける“負け犬”という鉄鎖を握るのが“桜”ならば、その鉄鎖を断ち切るのはこの目の前の桜色の少女なのかもしれない。

好きな女の一人もこさえないで、柵に囚われっぱなしで野垂れ死ぬなんて若い者のする事じゃない。

そんな風に思ったのは、妻なし子なしで五十前まで歩いてきてしまった男の勝手な老婆心であり、湯島は歳を取ったといういつもの感慨を煙草の煙に紛らわせた。

n e x t

第3話・Prologue - ? - (後書き)

これにて、プロローグは終了です。

感想、評価等、宜しかったらよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0157q/>

とある敗者達の黙示録

2011年1月10日09時07分発行